

「感動・感謝の茨城国体に参加して」

野口 美千代

平成29年2月12日、坂東市立中川小学校にて、3市ハンドボール国体事務局の方からインタビューを受ける機会があった。

私達は「水と緑のまごころ国体」（昭和49年茨城国体）に少年女子で出場した、当時高3のメンバーである。

高校生ながらも、茨城を背負い水海道二高の名に恥じぬよう“優勝”を合い言葉に、炎天下・風雨の中も厳しい練習に没頭し、挫折しそうになれば励まし合い、互いに支え合ってきた「かけがえのない仲間」10名である。



監督鈴木孝八郎先生・大村久先生には、言葉にならないくらいお世話になった。今思えば、当時高校生だった私達でさえ「地元優勝」と県の大きな期待を背負っていたと感じていたのだから、先生方の思いや重圧は計り知れない。常に自分達のことは後回しで、私達のことを第一に考えてくれていた。これからもずっと生涯の師であり、尊敬する偉大な恩師には変わらない。今があるのも、先生方のお陰だとみんな思っている。私達は、両先生との出会いに、心から感謝している。

茨城国体では、私個人にとっては、謝っても謝りきれない痛切な思いがある。当時観客席に入れない程の人混みに囲まれ始まった、水海道一高を会場とした決勝戦、インターハイで優勝した大阪との対戦だった。接戦の大事な時、私がペナルティーを外した。いつものように最初のモーションでキーパーが左に動いたのが見えたので右下をねらい投げた。ボールは無情にも、バーに当たり跳ね返った。その時のことは今でも時間が止まったかのように鮮明に覚えている。

結果は6対5の1点差の準優勝・・号泣し「ごめん・ごめん」と泣き崩れる私に温かく声をかけ、肩を抱きかかえてくれた仲間がいた。

その時は、文字通り心身ともに支えてもらった。

先生も仲間の誰一人、私を責めることはなかった。

ねぎらいの言葉をかけてくれた先生と生涯のかけがえのない友に・・心より感謝している。

高校3年間で得たものは、人生において指標となった。

関東・東北豪雨で、鬼怒川決壊により甚大な被害を受けた中に、2名の友が被害にあったという連絡を受けた。

言葉にできない程、辛い毎日だったことだろう。

被害を受けた友は「ハンドボールをやっていたから、辛さにも乗り越えられた」と、へこたれない精神が家族を鼓舞し続けたと思う。

「諦めず励まし合えたのも、ハンド精神があったから」と笑顔で話してくれた友の顔が眩しく誇らしげに思った。

その友も含め、45年振りの茨城国体には、恩返しをしたいとみんなが口を揃えて言っている。

支えられ協力してもらった分の僅かでも、今度はサポーターとして、応援していきたいと思っている。

あと2年後に迎える国体、選手には生涯の頼れる師と一生つきあえる友との出会いが待っていることを教えた。

そして私達も、茨城県民として地元を盛り上げ茨城国体の成功を共に味わいたい。今から楽しみである。

